

七月二十六日

六時過ぎ目覚めてしまう。磯崎さんが芸術・文化の領域で才月をかけて世界に張り巡らせてきたネットワークの広さと深さを再び痛感するが、これはもう誰も真似する事が出来ないだろう。私事に始まり、私事を超えた力になっている。どんな組織もこの力を引継ぐ事ができない。例えば国家のそれであつてもだ。不思議な個人の形式が在る。そう言えば批評と理論の会の展開をどうすれば良いのかキチンとしなければならぬ。鈴木さんと相談しては。暑さ負けているヒマはないんだけど、やっぱり、負けるときは負けるね、例えば相手が暑さであつても。七時過ぎの家へ。お茶をいただき、七時四〇分三泉庵に出掛ける家内を見送り、再び下の家で眠る。とりとめもない事を考えながら、まどろむ。九時過ぎのテラスで朝食。雨模様の空が少し明るくなってきた。十一時過ぎの新幹線あさまで磯崎さんと東京に戻る。車中、中国の話し、世界中のコンペにまつわる建築家たちの話し等、聞く。記録をとっておけば、面白い本になるのになと思ひながら聞いていた。十二時過ぎ東京着。磯崎さんと別れ、大学へ。十三時過ぎ、森の学校その他打ち合わせ。十八時迄。夕食鴨汁せいろ喰べて、二十時前、世田谷村に戻る。

七月二十七日

家の小猫の名は二つある。私がつけたのはイワノフ、他はニコ

ライと呼び、時々それが入れ変わる。何故だか双方、ロシア風の名前なのは小猫の風情から来ているらしい。白猫で、両眼の色が違う。片方の眼は金色、もう片方は緑色である。金と緑の組み合わせが、ロシアの何かを想わせたのだろう。家族は誰もロシアに足を運んでいないから、その何かは本や、広告や、TVによつてもたらされている。そんな何かの世界のもう一つの現実を形作っている。昔も今も、それは変わりが無いが、現代はそれが加速しているのが特徴だろう。我ながら、意味あり気な事を述べて恥ずかしい。

八時半、世田谷村地下、左官屋入る。地下の現場テラゾーとぎ出しはそれなりにうまくいつているが、スペイン・カタロニアのテラゾー制作技術とは、私の知る範囲ではまだ、月とスツポンプである。九時前、河野鉄骨、河野君と打ち合わせ。九時半修了。十一時研究室、佐々木睦郎氏と打ち合わせ。十二時半迄。さぬきうどんの昼食後、十三時より幾つかの雑事。雑事、雑事。十七時迄。十八時半、五反田、トモコーポレーション社長と打ち合わせ。二〇時過ぎ、とり敢えず修了。地下の寿司屋で友岡清秀君と夕食。二十一時過ぎ了。二十二時前、五反田駅前でいま一度ビールを飲んで散会。只今、二十三時十分、京王線桜上水、今日中には世田谷村に帰れるだろう。

七月二十八日

昨夜、帰宅したら鹿島出版から高山建築学校の伝説と名付けられた本が届いていた。編集の海光君は御苦労様であった。熱心に読んでしまい、深夜二時頃眠った。

七月二十九日

八時四十分杏林病院。昨年未だ、二度の事故の後始末とでも言うべき事に時間がかかっている。しかし、アノ事故は天の恵みでもあった。この際、徹底的に身体と精神のくたびれているところをオーバーホールしてしまうつもり。人体を飛行機に例えるならば、金属疲労の部分のメンテナンスをおこたると、一気に破壊墜落という取り返しのかかぬ事になってしまう。十二時三〇分京王稲田堤。昼食冷し中華。十三時過厚生館現場。十四時八大建設西山社長打ち合わせ。十五時過新宿西口コーヒーショップにて、野村と森の学校打ち合わせ。チョツとガウディ風になり過ぎているな。ガウディをバラバラにして組み立て直すような事ができないか。フリーハンドをバラバラにして、その部分があるルールをもつてアッセンブルする。口で言うのはたやすいが、スケッチにとすのは至難の技だ。十七時半六本木。三〇日まで不在だと聞かされている鈴木博之先生に電話してみたら、今日帰国との事。しかし、家にはまだ戻っていない。今日は、藤森照信の巨石文化を巡る旅の、サマータイムレクチャーを磯崎アトリエできこうという、面白い会があるのに鈴木さんは残念な事をしたな。十八時磯崎アトリエ、磯崎さん、アレクサンドロ・ソクーロフのタジキスタンでの記録映画を視ていた。「精神の声」と題された延々五時間の日常の戦争をとったもの。砂漠の戦争の現実がとてもゆっくりにとした時間の中で、行われている恐さが描かれている。兵士達のゆっくりにとした日常の中で、突然戦争が起きる。何のギャップもきれつもない。画面が赤っぽくて、砂漠の戦争の現実をよく写し出しているような気がした。一時間程見て、藤森照信の巨石文化を巡る旅のスライドレクチャー。エジプト以前の建築の発祥に眼

をつけているようだ。六千年前、日本の縄文時代の建築である。二〇メートルの巨石が立ち上がっていた事実もあつたらしい。太陽神信仰、生と死の儀式がそのまま建築の原型になっているのを、彼は確かめたかったのだ。修了後、三人で近くのイタメシ屋で会食。藤森さん相変わらず良く喰べる。つられて、私も少々食べ過ぎた。ブランクーシ、イサム・ノグチの形は巨石文化への関心から来たものらしい。今年の夏、藤森さんから巨石の葉書を二通もいただいで以来、気になっていたもので、その感動の素を遅ればせながら体験できたのは嬉しい。藤森があれ程感動しているんだから、キツと非常に大事なモノがあるのだ。やっぱり、あいつは旧石器時代人の想像力の持主だな。